

『好色一代男』の地名意識

―巻七「新町の夕暮島原の曙」を中心として―

平林 香織

―はじめに

西鶴の浮世草子第一作『好色一代男』（天和二年（一六八二）正月刊、大本八巻八冊全五四話）は、主人公浮世之介の諸国遍歴を描く前半部（巻一―巻四）と、遊郭での遊興生活を描く後半部（巻五―巻八）で構成される。一話一話は独立した短編だが、五四章からなる一代記としての長編的な性質も備える。京都の本店の息子として大切に育てられた世之介が、放蕩が過ぎて勘当され、全国を放浪しながら色道修行をし、やがて勘当が解けて遺産を相続し大尽生活を繰り広げ、人生の最後を女護の島で過ごすために出帆する。一人の男の好色生活を五四の年立てで描くという内容・形式や当代の色好みの男を描いているという点で、早くから『源氏物語』や『伊勢物語』との関係が論じられてきた¹⁾。また、さまざまな注釈書に明らかのように『徒然草』や謡曲の援用も多い。近年では、信多純一を中心として挿絵の考証などから『義経記』や『曾我物語』との関係も指摘されている²⁾。『源氏物語』も『伊勢物語』も色好みの貴公子が女性遍歴を重ねながら、自己の本性や愛の本質に気づいていく成長物語であるし、『徒然草』からは兼好法師の自我意識の遍歴を読み取ることができる。そして多くの謡曲は、諸国一見の遍歴のワキを対話の相手に設定しながら、シテが自身の精神の遍歴に決着をつける文学である。また、『義経記』の主眼は頼朝

に追われる義経の逃亡遍歴であるし、『曾我物語』における兄弟も父の敵を討つために諸国を遍歴する。やや乱暴な言い方になるが、物理的にも精神的にも自己の居場所を求めてあちこちさまようことが遍歴であるとするなら、世之介像には、空間的（物理的）、あるいは人間的（精神的）な「遍歴」の表象の投影があるのかもしれない。作品の前半部では文字通り全国の色里を遍歴しつつ、自己の粹人像を模索する世之介であるが、後半部においてさらなる粹の理想を求めて三都の遊里を経巡りながら時には庄内や長崎に出かけ「色人」（いろびと）（巻四「目に三月」）としての道を探求している。

世之介の遍歴は諸国ばなしという作品の形式と密接にかかわる。それは単に空間的な彷徨を意味するだけではない。世之介は、一代記という作品の枠のなかで、好奇心と向上心から日常的な時空を超えて新たな時空を経験しようとしている。そういう意味で世之介の諸国遍歴は、精神の遍歴の軌跡でもある。

『好色一代男』以降、西鶴の浮世草子全二四作のうち、第三作『西鶴諸国はなし』（貞享二年（一六八五）正月）をはじめとして諸国ばなし形式で書かれている作品は一七作品である。それに対して、次の七作品が、京・大坂・江戸の三都にほぼ限定された短編集である。

『諸艶大鑑』（貞享元年四月（一六八四））

『腕久一世の物語』（貞享二年（一六八五）二月）

『好色一代女』（貞享三年（一六八六）六月）

『嵐は無常物語』（貞享五年（一六八八）三月）

『色里三所世帯』（貞享五年（一六八八）六月）

『世間胸算用』（元禄五年（一六八七）一月）

また、京都所司代の裁判話集である『本朝桜陰比事』（元禄二年（一六八七）

一月)は、京都限定の話になっている。

西鶴の浮世草子作品の三分の二以上が諸国ばなし形式である。その第一作である『好色一代男』の諸国ばなし形式というスタイルについて改めて考えてみる必要があるだろう。

これまで作品前半部の諸国遍歴は、全国各地の遊里の風俗を紹介するための設定であるといわれてきた。しかし、さまざまな土地が話の舞台になっているのは、遊女評判記や名所記のように土地の風俗を紹介するためだけではないだろう。結論を先にいえば、いろいろな名所旧跡を通過しながら全国津々浦々の色里を世之介が訪れ、土地の遊女たちと交流することで、各地に世之介の色道伝承が上書きされる。そのたびに世之介色道圏が広がっていくのだ。西鶴は地名のもつ多層性をうまく利用しながら、日本全土を世之介の色道説話によって象ったといえる。世之介は、最終章「床の責道具」では女護の嶋を目指して日本を後にしている。それを暗示するかのように巻三「集札は五奴の外」で、寺泊の遊女が世之介に「私語しは」「こなたは日本の地に、居ぬ人じゃ」ということばだった。世之介は日本全国を踏み分けたのちに、日本列島を飛び越えていった。『好色一代男』は、地名が織り込まれることによって空間的な広がりや歴史性をもった作品となっている。本稿では、地名を巧みに利用した西鶴の創作方法を明らかにする。

まず、作品全体に地名がどのように用いられているかを俯瞰したのち、具体的な話として巻七の最後に置かれた「新町の夕暮島原の曙」を取り上げる。この話は、一晚の間に大坂の新町から京の島原へ駕籠で移動した世之介の小さな旅を描く。伝説の場所を通過しながら島原にたどり着いた世之介が、最後は、島原で、地名を名に持つ遊女たちに圍繞される。『好色

一代男』の中でも地名の出現率が高く、西鶴の地名意識が端的に表れた話だ。また、作品中遊女の名前がもつとも多く書かれている点にも特徴がある。地名と人名はともに固有名詞である。そもそも氏は土地に由来するものが多い。都市の遊郭における遊女の名前もそれぞれの出身地にちなんで名付けられていた。今でも親戚や身内同士で呼び合ったり名乗りあったりするときに、住んでいる町の名を呼称として用いることが多い。地名と人名は近い関係にある。地名と人名が多く出現する「新町の夕暮島原の曙」は『好色一代男』にあらわれた西鶴の地名意識を考える上で重要な一話である。

二 前半部と後半部の地名の分布

『好色一代男』を読み進めると、前半の諸国遍歴部分だけではなく、後半部においても、世之介が、時に歩いて、時に船や駕籠といった乗り物に乗って、東奔西走していることがわかる。ちなみに、全五四話に登場する地名を一覧にすると表1のようになる。

話の舞台を、三都の遊郭(島原・新町・吉原)、上方に近い五畿、上方から遠い七道に分類した。表1の左側に話の舞台を記入し、それぞれの話に出てくる地名を横に並べた。実際に世之介が通過したのではなく、説明として例示的に取り上げられている場合には括弧を付した。この一覧をみると、多くの土地に世之介が出かけたり、さまざまな土地のことが話題にのぼったりすることで『好色一代男』の世界が成り立っていることに気づく。それと同時に三都以外の土地の話の中でも、「京」「都」「大坂」「上方」「江

百二十里」五二歳、巻八「情のかけろく」五七歳)。つまり、後半部で世之介は、定期的に京・大坂・江戸の三都を周回しているのである。江戸を舞台とする話の内容を一話ずつ確認してみよう。

巻六「匂ひはかげ物」は、「京の女郎に、江戸の張はりを、もたせ、大坂の揚屋で、あはば、此上、何か有ある(る)べし」と、三都の遊郭を比べる当時の常套句が始まる。吉原の吉田という遊女に世之介が会いに行く話だ。冒頭の三都の遊女比べの記述に続いて、次のように吉原の太夫・吉田を紹介する(太夫名に傍線を付した)。

^三爰こゝに吉原の名物、よし田といへる、口舌くせつの上手あり。風義は一文字屋の、金太夫に、見ますべし、手は野風程書かて、然も歌道に、こころざし深し。

京・島原の太夫「金太夫」よりも容姿が勝り、やはり島原の太夫「野風」と同じくらい達筆で、その上歌道の嗜みがあったと評価される。島原の遊女を基準に「よし田」が評価されている。世之介が粹な大尽として三都の遊里を知り尽くしていることを暗示する。

巻七「さす盃は百二十里」は、吉原の名妓高雄に会うために五人の太鼓持ちと八人肩の駕籠に乗って江戸へ東海道を下っていく話である。表題の「百二十里」は、京と江戸の距離である。表1からわかるように、作品中もつとも多くの地名が出現する話である。江戸へ着くまでの道中に通過する三河や駿河、武蔵の国々の地名が織り込まれていることと、江戸へ着いてから吉原へ行くまでの道筋が細かく記されているためである。「夜やり日やり」に「東海道を下りながら、十団子売りの女、酒屋や安倍川河畔の傾城町、三島の遊女屋の跡など、高雄に会うまでの待ち遠しさが募るような色香漂

う場所の描写が続く。そして、いよいよ江戸に入り、もったいぶるかのよりに少しづつ吉原に近づく地名が重ねられる。高雄との出会いを目指す一行の胸の高鳴りが伝わる。地名に傍線を付して引用してみよう。

六人恋の山入。金龍山を目当に、浅草川の二挺立、駒形堂も跡になして、日本堤にさし懸り、あさぢが原こづか原、名所の野、三ツあるに付つて、三野と申し(し)侍り。又三谷とも書か(け)り。大門口の茶屋にて、身ぶりを直し、清十郎といへる揚屋に行(き)て、上方のお客と申(す)、御名は先立さきだつて承(り)及(ぶ)

波線部「清十郎」という人名も効いている。

やつのことで高雄に会えた世之介であるが、期待以上の高雄の美しさに気押されて緊張のあまり身がすくんでしまう。高雄の振舞いは次のような見事なものだった。

(高雄が)帯をときて御寝なれと、仰おほせられてもおそろしくてとかず。申まうし、それは私の志し、無むに成(る)といふ物じや。初はじめのほどは、ふとも冷ひえて有(り)しを、よしなき二人をあたたためさせ候甲斐もなしと、様子よく帯とかせて、直付すぐつけに肌をゆるして、又ちかちかにあふ事も希まれ也。御心まかせにと初はじめ而ての床しかけの仕懸しかけ、各別世界に、又あるまじき太夫也。

めつたに会うことができないだろうからという高雄のことばは遠くからやってきた世之介へのねぎらいの気持ちにあふれている。京から江戸へという距離感を巧みに利用した話である。

卷八「情のかけろく」も、同じように京と江戸の隔てを越えて客と太夫・小紫が会う話である。仕立物屋の十蔵が吉原の小紫に会いに行くという。大尺世之介とちがつて、十蔵にとつてはなけなしの金をはたいての一世一代の大勝負だ。仲間たちが面白がつて、名妓・小紫が十蔵ごときに会ってくれるかどうかを賭けて、その証人として宇兵衛を同道していた。世之介も面白がつていっしょに江戸へ下ることにする。うだつの上から十蔵に対して、小紫は誠意を尽くし初会であるにも関わらず身を任せ、下帯に「十蔵さまに身まかせ候。何か偽有いつはり(る)べし」と書き、「むらさき筆」と署名までした。世之介があとから尋ねてみると「すこしたらぬ人を賭かにして遣つかはしけると、さながら見えませすによつて、先さまの人、憎にくさにもくし、あんな男に、あふてとりました」と言う。そして、大尺で粹人の世之介がいろいろ口説いても相手になつてくれなかつた。この話も京と江戸の距離が大きくものをいう話である。

そして後半部では遠隔地の話も、中心部と太いパイプで結びついたものになっている。前半部でも下関の遊里や小倉の遊里へと船で移動したり(巻三「袖の海の肴売」二二歳)、魚売りとなつて佐渡から坂田(酒田)へと辿り着いたり(巻三「木綿布子もかりの世」二五歳)している。これら遠隔地の遊里や私娼が、それぞれの土地柄に応じた珍しいものとして描写されてきた。それに対して、後半部に描かれる九州や陸奥の話は、周縁から中心を見る話である。

巻五「当流の男を見しらぬ」は、四〇歳の時に船で筑前まで行き、その帰りに安芸の宮島の遊里へ寄る話だ。勘当が解かれ資産を相続し、巨万の富を手に入れた世之介は、好きな時に好きな場所へ誰とでも行ける財力を手にした。世之介はわざと野暮ったく身をやつして宮島の遊女たちにな

がしろに扱われる。それを当てこするかのようになり、挟み箱から畳み舞台を取り出して人形浄瑠璃をしてみせる。すると暫間が、人形が吉原の太夫にそっくりだと驚く。世之介は我が意を得たりとばかり、吉原の太夫に似せて作った人形であること、その太夫は同じ身なりの三人の客の中から、鼻緒ずれのない男が身分の高い「大名」であること見抜いた話をする。安芸の宮島を舞台にしつつ、話の眼目は吉原の太夫の行動にある。

巻七の「諸分の日帳」(五三歳)は庄内へ米の買い付けに出かけた世之介のもとに新町の太夫・和州が世之介不在の一月分の日記を書いてよこす話で、大半は和州の日記である。したがってそこに描かれるのは新町の太夫の日々の暮らしぶりである。和州の手紙には、世之介が恋しくて仕方ない、しかも、このごろ客が減つたために京へ鞍替えとなる、そうなたら自害すると書かれていた。世之介が涙を流しているとそこへ和州のまぼろしが出現する。放つてはおけないと世之介は新町へ飛んで帰る。和州の思いの強さが大坂と庄内の距離を越えて世之介に届く。最北の地を舞台にしなが、上方との距離を感じさせない話である。

また巻八「都のすがた人形」は、還暦直前の世之介が長崎へ出かける話だ。日本を船で脱出する世之介の最後の遊びの場所として、外交都市長崎が選ばれる。かつて京都で接待した人々が長崎で世之介を歓待してくれた。世之介の交友関係の広がりを表す。丸山遊郭に常設の能舞台で遊女能を堪能した世之介は、自分が島原の太夫に三五両の焼き鳥を食べさせた時以上に感激した、と言う。すると遊女たちが世之介にそんなことをしてもらえほどの太夫たちの顔が見たいといい、世之介は持参した三都の遊女の姿人形一二体を能舞台に並べて見せる(図1「都のすがた人形」挿絵参照)。話の末尾は次のとおりである。

長櫃十二さほ運ばせ、此中より大夫の衣装人形、京で十七人、江戸で八人、大坂で十九人、彼舞台に名書てならべける。めいめいの仕出し、顔つき、腰つき、ひとりひとり替て、所によりて是は誰、それはどなた、いづれか、いやらしきはあらず。長崎中寄て、詠め暮しつ。

世之介と関係を持った三都の太夫の姿人形四四体が能舞台上に並ぶ。世之介が動き回った世界を象徴するものだ。夢幻の空間に世之介の遊興の時間が一瞬にして立ち現れる。丸山遊郭に出現した島原・新町・吉原の太夫たちが、世之介の栄華を永遠に封じ込める。そして遊興生活に終止符を打って女護の島へ旅立つ次章「床の責道具」につながっていく。

このように、空間的な距離感を強調したり無化したりして有効に利用した話を所要所に挿入しながら、西鶴は、日本列島全体を股にかけて遊興する世之介の姿をダイナミックに描いている。

次に、巻七「新町の夕暮島原の曙」に焦点をしばり、西鶴の地名の使い方をおくわしく検討してみよう。

三 「新町の夕暮島原の曙」

「新町の夕暮島原の曙」は、三つの場面で構成される。①菊の節句日の夕刻の新町での遊興、②新町から島原への駕籠移動の道中、③明け方の島原の風景と島原での菊の節句の後宴、の三場面である。

梗概は次のとおりである。



図1 「都のすがた人形」の挿絵

①菊の節句の宴を見に新町へ出かけた世之介は、まず西口の揚屋・太兵衛のところの軒下ですだれを掛けさせ、太夫「高間」が新艘（初めて勤めに出る女郎）の妹女郎を連れているところを眺める。簾越しに見ると、見知らぬ下位の女郎も魅力的に見える。気分良く、九軒町の住吉屋へ行き、太夫「あげ巻（総角）」についている禿の「るい」と酒を酌み交わしながら端居して、前を通る遊女をかかっては盃を取らせる。「兼好」という太夫が、「下戸ならぬ、男のよいをすいた」と『徒然草』初段（「下戸ならぬこそ男はよけれ」）めいたことを言い放つ。さらに佐渡嶋町の扇屋である太夫と過ごしていたが、ふと都が恋しくなってしまう。

②すぐに道頓堀に行つて四人担ぎの駕籠を調達し、道を急いだ。午後八時頃佐田の天神を通過し、駕籠屋と熱爛で一杯やり、交野、淀の小橋、鳥羽の恋塚を通過して、遊び人・森某が駕籠かきを殺害した現場付近の四つ塚にさしかかる。その茶屋で駕籠かきたちが水を所望した。夜が明けゆく頃、朝帰りの客待ちのために起き出した丹波口の小兵衛の茶屋にたどり着く。

③茶屋の主が世之介を見てきのう「高橋」が会いたがっていたと教えてくれた。「きのうは新町の暮を見捨て、その目をすぐにけふ島原の朝明、これが唐にもあるべきや」と朝の島原の景色を楽しんでいると、

身請けされた太夫「歌仙」が町の女房風情で郭を後にするところだった。「名残惜しいが、どちらへ？」と訪ねると「我が庵は」と喜撰法師の古歌にかこつけて言い捨てていったが、実は宇治へ行つたのではなく六角堂の裏あたりに身請けされたのだ。世之介来訪の知らせを受けた高橋のところから引舟女郎や太鼓女郎などが次々にご機嫌伺いにやってきた。昼寝をして夜の移動の疲れをとり、菊の節句の後宴を開いた。太夫の「高橋・野風・志賀・遠州」、引舟女郎の「蔵之介」、「対馬」、「三よし」「土佐」が集まった。通りすがりの太夫「唐土」「かをる」「奥州」とも他愛のないやり取りをし、至れり尽くせりのまま夜が更けて太夫の優しいことばを聞きながら寝入っていった。

本話は巻七の最後の話である。巻五からはじまる世之介の大尺生活が極まった五五歳のエピソードだ。下段表2は『好色一代男』に登場する遊女の名前を抜き出したものである。太夫、天神、囲女郎、禿といった遊郭の公娼だけでなく私娼の名前もある。登場する遊女すべての名前が記載されるわけではない。「新町の夕暮島原の曙」が群を抜いて遊女名が多く書かれていることがわかる。

全五四話のうち遊女の名前が記される話が二八話、半数以上である。当然のことながら三都の遊郭を中心に世之介の好色生活を描く後半の話には、ほぼ毎回遊女の名が書かれ、全国を行脚して色道修行をする前半には少ない。そして登場する太夫名はほとんどが実在の遊女の名である。網掛けを施したのは、国名、都市名、川の名、山の名など地名と関連する名前である。

表2 『好色一代男』における遊女名 (合計86)

| 巻 | 章 | タイトル | 遊女名 |
|---|---|------------|---|
| 1 | 1 | けした所が恋はじまり | かつらき かをる 三夕 |
| 2 | 4 | 誓紙のうるし判 | 鳴川 志賀 千とせ きさ 近江 玉の井 大崎 |
| | 5 | 旅のでき心 | 若狭 若松 |
| 3 | 2 | 袖の海の肴売 | 花鳥 八嶋 花川 にな川 越中 藤浪 |
| | 5 | 集札は五匁の外 | 小金 高雄 |
| 4 | 6 | 目に三月 | 小太夫 石州 |
| 5 | 1 | 後は様つけて呼 | 吉野 |
| | 3 | 欲の世中に是は又 | 若山 |
| | 5 | 一日かして何程が物ぞ | かつらき 高崎 |
| | 6 | 当流の男を見しらぬ | 高崎 |
| | 7 | 今爰へ尻が出物 | 小倉 市橋 |
| 6 | 1 | 喰さして袖の橘 | 三笠 |
| | 2 | 身は火にくぼるとも | 夕霧 背山 大橋 お琴 朝妻 |
| | 3 | 心中箱 | 藤浪 花崎 |
| | 4 | 寝覚の菜好 | 御舟 よし岡 妻木 きぬかへ 初雪 |
| | 5 | 眺は初姿 | 初音 小太夫 野風 |
| | 6 | 匂ひはかつげ物 | 吉田 金太夫 野風 |
| | 7 | 全盛歌書羽織 | 野秋 |
| 7 | 1 | 其面影は雪むかし | 高橋 |
| | 2 | 末社らく遊び | 薫 |
| | 3 | 人のしらぬわたくし銀 | 瀧川 半太夫 薩摩 |
| | 4 | さす盃は百二十里 | 高雄 小紫 金太夫 かせ山 |
| | 5 | 諸分の日帳 | 和州 八千代 霧山 吉川 利兵衛 越前 勝山 |
| | 6 | 口添て酒軽籠 | 吾妻 |
| | 7 | 新町の夕暮島原の曙 | 高間 あげ巻 るい 高橋 歌仙 対馬 吉弥 三芳 土佐 野風 志賀 遠州 野世 蔵之介 唐土 かをる 奥州 |
| 8 | 2 | 情のかけろく | 小紫 |
| | 3 | 一盃たらいて恋里 | 吉崎 |
| | 5 | 床の貢道具 | 吉野 |

※網かけは地名由来の名前 (計49)

表からは、延べ八六人の名前が登場することがわかる。そのうちの半数以上の四九人が地名由来の名前をもつ。遊郭には日本の地名が美しく擬人化されてそろっているという趣である。現代でも相撲取りの四股名に出身国や出身県ゆかりの文字を入れ、なおかつ力強さを表現する。遊女の名前にも縁のある土地の名と優美性が求められたのだろう。

藤本箕山『色道大鏡』巻第十一冒頭「傾国名題」には次のように書かれている。⁽⁴⁾

傾城の名は、風流なるをもて第一とす。となへこはくしきもあれど、往古付来りたるは又しかり。さるに傾めづらしき名どもを付るあり。聞よくてやさしければ珍重なれども、さたのかぎりなる名どもおほし。物じて、物に名付るといふは、出所あるか、さなくは落着したる名ならでは付がたき事也。

箕山は、遊女の名前の条件として、風流であることが大切であるとい、新規な名前よりも、由来が明らかであったり、すでに人口に膾炙したりして、安定した名前がいいという。都市の遊郭は、制度化された悪所である。全国各地の出身者から構成される遊女が、全国各地からの遊客の相手をする。土地の名は行政区画という点で制度化された記号であるから、それを遊女に冠することで普遍性が保たれる。土地由来の遊女名は、「其者に付て相応の名」であるし、文字通り「出所」があり、人々の耳になじんだ「落着したる名」といえるだろう。

前節で確認したように、「新町の夕暮島原の曙」に続く巻八は、「情のかけろく」で「小紫」が登場し、京都から来た仕立者屋の十蔵に身をゆるす

話である。続く「一盃たらいで恋里」では、島原の太夫「吉崎」が新艘女郎として初めて郭に出る様子を描く。いずれも世之介の出番はほとんどない。「都のすがた人形」に個別の太夫は登場しないし、最終章も吉野の脚布が好色丸の旗印として掲げられるだけで、太夫は登場しない。つまり、本話が『好色一代男』の中で、世之介のホームグラウンドである島原での遊興を描く最後の話なのである。しかも、新町から忍び駕籠で陸路を移動して島原へ行き、新町での菊の宴と島原での菊の後宴を連日開催する。上方遊郭での豪遊のグランドフィナーレであり、それにふさわしく遊女たちが勢揃いしていることがわかる。

そして、遊女名とともに地名が次々とたたみかけられるのは、世之介が水路ではなく陸路を移動したからである。この点に、本話のもう一つの特徴がある。

テキストに即して、具体的に、地名記述をたどってみよう。世之介が新町から島原へ移動するくだりは次のように描写される。

其日は扇屋に有(り)しが、にくからぬ首尾ながら、与風都こひしく、おもふこそ二道也。此人を捨置、それよりすぐに、道頓堀にまかり、**〔置屋町〕**に、しるべの役者のかたより科なき身にも、しのび駕籠、四人懸りに乗さまに、吉弥と申(し)かはせし事も、恋が替れば、そこそこ言伝して、いそぐ心の夜の道、初夜の鐘のなる時、**〔佐太〕**の天神と申(す)。太夫は居ずとも、のむまいかと、**〔真柴折くべ〕**、焼味噌おかしく、此酔のうちに、**〔交野〕**さんやも跡に、**〔淀の小橋〕**は霧こめて、**〔鳥羽〕**の恋塚、合点じやと目覚し、ほどなく**〔四ツ塚〕**の茶屋あみ戸をあらくたたき起して、湯まではまたじ。息がきるるは、水のませと、下

下声に申(し)侍る。誠に一とせ、森が、道いそぐとて、駕籠の者殺せし野辺も、此あたりとおもひ合、北の空ゆかしく、星のうすきを待兼、丹波口の、小兵衛方に行ば、朝帰の人待顔に、片見世あけて、起出るより、是はめづらしき、御のぼり。高橋様も、まちびさしきと、きのふも仰られしに。先きかしまして、よろこばしませいと、門をたたきて、出口の茶屋につたえて、はや三文字屋に、人をやる。此朝眺のおもしろさ、西行は何しつて、松島の曙、岬湯のゆふべを嘗つるぞ。きのふは、新町の暮を見捨、其目をすぐに、けふ高原の朝明、これが唐にもあるべきや。世之介なんと、尤と、藤屋の彦右衛門方に立(ち)よれば、夜前の行灯消かたてに、物さびたる、釜はたぎりて、岩倉の松茸を焼て、中椀に、ふたつ飲、是はといふ所へ、歌仙仕合の身清、姿も人のおかためきて、出られける。御名残も今なり、何国へと申せば、我菴はと計云捨、別れ侍る。なんの、宇治へはゆくまじ。しらぬ事か、六角堂の裏あたりへ、行人よと、申(し)もはてぬに、太夫よりの御使、引舟の対馬、三芳、土佐など、宿よりは次兵衛、其外男共祇候して、只あれへと、祭のごとく、人橋懸るは、高橋今の御威勢也。此時の有様、大名もこんな物成(る)べし。昼寝て、まづ、夜の草臥を取かへし、暮よりおもてに、床机をなをさせ、九月十日の月も、いづれ都の風情。高橋、野風、志賀、遠州、野世、蔵之介がかしこさ、対馬が利発、三よし、土佐がつれ弾、大酒身をなし、過し所縁とて、もろこしに笑はせ、かほるが、尻目に懸られ、奥州にうなづかせ、しのばるる事も、おもひをのこさせし事有(る)べし。女郎のやはらか成(る)所、衣類の数を尽し、爰で外は、万あさまに成(り)ぬ。更過(ぎ)て床とるに、も、三ツ蒲団替夜着、枕も常ならず、寝巻もありといふ物もなく、か

しらから帯ときて、万事はつき添女郎に、身をまかせ、たばこも手してはつかず、ね道具も人にさせられ、やさしきおことばを聞ね入(り)にして、結構な夢をみる事ぞかし。

少し複雑に記号を付した。現実の地名は枠で囲み、歌枕には網掛けをほどこした。傍線部1〜4は古歌や故事をふまえた表現である。そして太線部は遊女名である。波線部は当代の事件に関する記述だ。

大坂・京都間の距離は約四五キロメートルである。当時は、淀川が大坂・京都間の行き来の大動脈で、三十石舟が利用された。国土交通省の淀川河川事務所のホームページによると、京都・伏見から大坂・天満への下りは、川の流れに乗れるので六時間、曳舟の必要な大坂から京都への上りには一二時間かかったという。世之介は新町から島原へ直行する移動であるから、駕籠をチャーターしている。駕籠のスピードを時速六キロとする、八時間弱の移動になるから、夕方に新町を出れば、明け方に島原に着くという計算になる。淀川を一二時間かけて伏見まで上り、そこから島原まで移動することを考えると、駕籠の方が早い。また、ここは、街道沿いの歌枕をあげることが重要であるから、水路ではなく陸路でなければならなかった。歴史的な伝承と現実の遊郭への道筋が交錯する表現を、ひとつひとつ確認してみよう。

傍線部1は『新古今和歌集』巻第六「冬歌」所収の藤原公衡の歌による。⁶⁾

鷹狩の心をよみ侍ける

左近中将公衡

かりくらし交野のましばおりしきて淀の河瀬の月をみるかな

この歌は、『歌枕名寄』（延元元年（一三三六）頃）巻六では「交野 真柴 月」「真柴 狩 淀川」の取り合わせの歌として紹介され、『詞林名所考』（慶安（一六四八）五二頃）では「交野 河内」と「淀 山城」の二カ所の項目に掲出される。一日中狩りをして交野で柴を折り敷いて休みながら淀川の瀬に映る月を見ていることだよ、という歌意で、『伊勢物語』第八二段を本説取りした歌である。

交野には渚の院があり、桓武天皇の交野離宮以来、禁裏御料の狩場だった。『伊勢物語』第八二段、第八三段は、渚の院での惟喬親王と在原業平や紀有常らの交遊を描く。第八二段は、業平が「世中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」という歌を詠んだ折のことだ。

狩はねむごろにもせで、酒をのみ飲みつゝ、やまと歌にかゝれりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり

狩りに出て狩りもそこそこに、酒を飲みながら歌に興じる人たちの姿を描く。業平の桜の歌に呼応させて、紀有常も桜の歌を詠む。

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世になにか久しかるべき
とて、その木のもとは立ちてかへるに、日ぐれになりぬ。御供なる人、酒をもたせて野より出で来たり。この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬頭、大御酒まいる。親王のたまひける。「交野を狩りて、天の河のほとりに至るを題にて、歌よみてさか月はさせ」とのたまうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし棚機つ女に宿からむ天の河原に我は来にけり
親王、歌を返、誦じたまうて、返しえしたまはず。紀の有常御供に仕うまつれり、それが返し、

一年にひとたび来ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ
帰りに宮に入らせ給ぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬頭（業平）のよめる

あかなくにまだきも月のかくる、か山の端にげて入れずもあらなん
親王にかはりたてまつりて、紀の有常、
をしなべて峰もたひらになりなむ山の端なくは月も入らじを

この話を本説として「霰降る交野の御野の狩り衣濡れぬ宿かす人しなれば」（詞花集・長能）、「思あへず袖ぞぬれぬるかり衣交野の御野の暮方の空」（拾玉集・慈円）など多くの歌がよまれた。狩場という宮中を離れた開放的な場所での悲運の貴公子惟喬親王を囲む気のおけない友人同士の和歌を詠み合いながらの酒宴は、多くの歌びとの想像力を刺激した。

『新古今和歌集』の公衡の歌は、『伊勢物語』の話から「狩・交野・月」の語を抽出し、「真柴」「折りしく」「淀の河瀬」という新しい詞を重ねる。狩そつちのけの室内の歌による交感という情景に対し、一日中狩をしたあと外の川辺に一人座る風情。山の端の月を惟喬親王に見立てる『伊勢物語』と、公衡の歌の水面の月影へのまなざし。『伊勢物語』第八二段の世界を揺曳しながら公衡の歌もまた、人口に膾炙していった。「片野」「真柴」「狩」を詠み込んだ歌に次のようなものがある。

雪つもる片野の真柴打ちはらひたたぬ日次に出づる狩り人（永享百首・公保）

真柴吹くかたのの原の夕風に電玉ちる狩人の袖（菊葉和歌集・三善為徳）

けふもはや片野の原に狩暮れぬ真柴折しき宿やからまし（同右）

いまいくか残る日なみの御狩場にかたのの真柴ふみならさまし（公義集）

御狩野や真柴をしをる風の音にいとど鳥立のかずもしられず（続垂槐集・雅親）

世之介と駕籠かきは「太夫居ずとも、のむまいか」と、真柴を「折くべ」焼味噌を作り、酒肴とする。真柴を折り敷いてその上に座り水面の月を眺めるという繊細な雅が、柴を焚いて味噌を焼くという野趣あふれる俗に転じる。このような雅と俗、伝承と現実の混交は、傍線部②も同様である。

傍線部②の「鳥羽の恋塚」とは、『源平盛衰記』一九「文覚発心事」により広く知られる源渡の妻袈裟御前が、自分に懸想した遠藤盛遠に夫と偽って自身を殺害させた悲劇の地である。袈裟御前の遺骸を埋葬した「恋塚」は、京都市南区上鳥羽鐘ヶ淵町の実相寺と京都市伏見区下鳥羽城ノ越町の恋塚寺の二カ所にあったという。前田金五郎は、前者の塚には石碑がありその願主が永井直清で、少し前に書かれる「佐田天神」が永井直清の兄・永井尚政が寛永二〇年（一六四三）に再興したものであるから、西鶴が思い浮かべていたのは上鳥羽の恋塚ではないかと推論する。⁸ いずれにせよ袈裟御前の捨て身の行動は広く人々の知るところであり、恋塚が近い場所⁸に二基あるというのもそれだけ鮮烈な伝承だからだろう。『歌枕歌こと

ば辞典⁹』によると、平安時代中期以降、好忠の歌「山城の鳥羽田の面を見渡せばほのかに今朝ぞ秋風は吹く」（詞花集・秋）を先勝として「鳥羽田の面」の語が好まれ、「稲葉」「秋風」「雁」「露」などとともに、鳥羽の地は「寂寥感の漂う秋」の景に詠まれることが多いという。ほろ酔いのうちに駕籠の中で眠りこけていた世之介は、「鳥羽の恋塚」の声に「合点じやと」目を覚ます。悲劇の伝承を抱え込んだ物寂しい「恋塚」付近で世之介は駕籠かきに叩き起こされ、伝承と現実が交わる。

次の通過点四ツ塚は、「東は東福寺、西は桂川、北は丹波口、南は上鳥羽に至る四辻¹⁰」である。駕籠かきは茶屋で水を所望する。日中は交通の要所として多くの人が行き交う場所であるが、夜のしじまに沈んでいる。ところが、そこは、波線部にあるように、「森が道いそぐとて、籠の者を殺せし野辺」であった。「森」なる人物の詳細はわからない。西鶴は『男色大鑑』巻八「小山の関守」で、河内国藤井寺の開帳参詣の折に、「森といふ男、按摩取¹⁰の休古をつれてきたるにぞ、一しほおかしさまされ」と書き、「森」なる人物を登場させている。森といえは知っている人には誰のことかわかったはずだ。その「森」が、先を急ぐからと駕籠かきを切り捨てた事件があった。夫への貞節の証として我が身を殺害させた袈裟御前という伝承に、正当な理由のない武家による駕籠かきの殺害という当代の事件が重ね合わされている。武士の殺人という点では同じだが、考え抜いた末の切羽詰まった人妻の苦肉の策と八つ当たりのような衝動殺人の不合理との隔たりは大きい。

さて、夜が白む頃ようやく鳥原の入り口「丹波口」の茶屋に到着する。世之介はなじみの上客である。茶屋の主に、ちようどきのう太夫高橋が世之介に会いたがっていたと言われ、世之介は気をよくする。鳥原には世之

介を待つ太夫がいたのである。大坂から一気に駆け上った甲斐があった。目と鼻の先が島原の大門だ。折しも夜を郭で過ごした人たちが門を出て行く。世之介は彼らとすれ違いながら大門そばの「出口の茶屋」に入る。早速高橋の居る三文字屋に遣いを出す。

居心地の良さに満足する世之介に、茶屋の主が、傍線部3にあるように、なぜ西行はわざわざ「松嶋の曙、蚶湯のゆふべ」を称揚したのだろうか、そぶく。この島原の朝明けは中国にもないようなすばらしいものではないか、と。主にそう言われた世之介は「尤だ」と深く頷く。『新古今和歌集』巻第一〇「羈旅」の江口の遊女と西行の歌のやりとりを踏まえてのことである。

天王寺に詣で侍けるに、俄に雨ふりければ、江口に宿を借りけるに、貸し侍らざりければ、よみ侍ける 西行法師

世中をいとふまでこそかたからめかりの宿りをおしむ君かな

返し 遊女妙

世をいとふ人としきけばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ

西行説話の中でもっとも有名な伝承の一つである。脱俗の西行と俗世の底辺で生きる遊女が宿りのための「かりの宿り」を貸す貸さないのやりとりをしている。旅僧と遊女という身分や立場の異なる者同士が歌で交感した話は、遊女に慰めを求める世之介の好むところだろう。江口の遊里に遊びながら、陸奥の景勝を愛でる気持ちが変わらないというのである。当時「松島や雄島の磯も名にならずただ象潟の秋の夕暮」が西行の歌として伝承されていた。西行には有名な「こゝろなき身にも哀れはしられけ

りしぎたつ沢の秋の夕暮」(新古今集・巻第四・秋歌上)という歌もある。夕暮の歌人西行が松島の形式よりもすばらしいと褒めた象潟の秋の夕暮の景色よりも、「新町の暮を見捨」てやってきたここ島原の朝明けの景色はたぐいまれなものだという文脈である。「唐にもあるべきや」と目を日本の外に向けている点も見逃せない。

傍線部4は、「歌仙」という太夫とのやりとりである。西行と江口の遊女が歌でやりとりした向こうを張るかのようなエピソードである。世之介の前を身請けされる歌仙がうれしげに通っていく。世之介が「どこへ身請けされるのか？」と訪ねると、歌仙は、「わが庵は宮この辰巳しかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」(古今集・巻第十八・雑歌下)という喜撰法師の歌を引歌にして、「我菴は」(わがいは)とだけ答えて立ち去る。自分の源氏名「歌仙」を「六歌仙」喜撰にひっかけて空とぼけたのである。しかし、世之介は、宇治ではなく六角堂へ行くのだろうと推理する。六角堂は現在の中京区にある頂法寺の通称である。本坊は池坊、今でも続く華道家である。古歌を織り込みながら、池坊の家元が歌仙を身請けしたという最新のゴシップを伝えている。そして、この六角堂は世之介一五歳のときに後家との間にできた子どもを捨てた場所である(巻二「髪きりても捨られぬ世」)。周辺は広場のようになっていて、出代わりの奉公人が一休みしたり(「出替りや六角堂の縁もあれ」(或時集・永花)、奉公人を雇い入れる周旋屋がいたり(洛中の奉公の口聞合わせ／六角堂に人はよりより(時勢姿西翁／重安))したという。捨て子どもも多く世話をする乳母もまた多く行き交った場所である。「六角堂」という地名に、太夫・歌仙の未来と世之介の過去が重ね合わされる。

やがて、世之介のもとへ世之介を待ち焦がれていた高橋をはじめ次々と

遊女たちが集まってくる（引用・太線部）。まるで祭のような美しい大夫の「人橋」である。一二の名前が並ぶが、うち八つは地名である。南は「対馬」北は「奥州」、そして、「もろこし」もあり、大変広がりがある。日本中の地名があり、外国もある。

近年、刀剣や戦艦を擬人化したゲームや漫画が流行っている。擬人化サブカルチャーの走りともいえるべき『ヘタリア』という漫画がある。インターネット上で公開されたのを端緒に、単行本やアニメーションがシリーズ化された。「ドイツ」、「イタリア」、「イギリス」、「日本」、「ルーマニア」など、登場人物の名前が国名そのもので、彼らは、それぞれの国の歴史と民族性が投影されたキャラクターとなっている。人物の言動が歴史的な事件を踏まえたり、お国柄やお国自慢の文物に重ね合わされたりする。決して観光地ではない町や村の地名が多く登場する。そこを訪ねるヘタリアの旅に出る若者も少なくない。

閑話休題。島原の菊の後宴に出現する全国の地名で呼ばれる遊女たちは地名が擬人化されたものでもある。そんな遊女に囲まれた姿は、全国の遊里を行動して歩いた世之介の人生の縮図である。遊郭という閉ざされた狭い世界に、地名を名にもつ遊女たちがいることは、世之介が領有する世界の広さと多様性を示す。この小さな旅を断行したことで、世之介は、名所を通過しながら空間と時間の境界を越えて不夜城・島原へとたどり着いた。夜でも昼のような明るさと賑わいの遊郭の時間には昼と夜の境界がない。歴史的な事件と現代の事件が重なる地籍を経て、日本全国の土地の名前をもつ遊女に囲まれた世之介は、物心両面の限界とさまざまな境界線を次々と踏み越えた存在なのだ。

四 おわりに

以前、世之介が人生の結節点において船に乗っていることの意味を考えたことがある¹²⁾。『好色一代男』の前半部の最終章「火神鳴の雲がくれ」で世之介は海難事故に遭い九死に一生を得る。それと同時に勘当が解け遺産を相続し大尺となる。そして後半部の最終章「床の賣道具」では好色丸に乗って船出する。後半、世之介は、しばしば費用のかかる船旅に出ている。船は、移動と遊びに不自由しない世之介の富の象徴である。一方、船に乗ることは危ういことでもある。『好色一代男』の読者は、女護の鳥が存在しないことも知っているし、いくら強壮剤を満載したとしても老いた世之介の旅の先に「抓どりの女^{つかどりのむすめ}」がいる未来が開けているとは思えない。船に乗る世之介の姿に、自由と不自由、拡大する世界と限界のある時間という対比的な構図をみることができる。

地名は、制度と祝祭、雅と俗、過去と未来といった相反する要素をつなぐ力をもつ。「新町の夕暮島原の曙」は、それを利用して、世之介の遊興の有終の美を飾った話である。西鶴は、新町から島原へ移動する世之介の通過点として、古歌に詠まれたり文学作品の舞台になったりした伝承の地を選択し、読者の想像力を刺激しつつ、しかしそこに拘泥することなくスピーディーなことばを運ぶ。太夫らに手取り足取り世話をしてもらい世之介が気分良く眠っている。話は「結構な夢をみる事ぞかし」と結ばれるが、「結構な夢」はいつまで続くのだろうか。たくさん遊女たちに囲まれている今



図2 「新町の夕暮島原の曙」挿絵

の時間も、「結構な夢」の中のできごとであったかのように思えてくる。遊女たちを一人も描かない挿絵(図2)がそんな印象を助長する。島原に着いた世之介が、出口の茶屋の店先で誘客とおぼしき帯刀の武士と話している。店先に火の灯った行灯が描かれ、入り口には編み笠を深くかぶったお忍び風情の朝帰りの客がいる。遊女名の連なる本文とは異なる趣である。世之介の遊里での夢の時間はもうしばらく続いて、やがて終わりの時を迎えるのである。

【注】

*西鶴作品の本文の引用はすべて新編西鶴全集(勉誠出版)によった。読解の便宜を図り、濁点・送り仮名・読み仮名を施したところがある。

- (1) 山口剛「西鶴好色本研究」(『山口剛著作集』第一巻、中央公論社、一九七二年四月。初出は、一九二七年～一九二八年の新潮社版『日本文学講座』一三～一五)、島津久基「西鶴と古典文学―特に一代男と源氏物語との関係を中心として」(『国文学の新考察』至文堂、一九四一年九月)。福井貞助「好色一代男における伊勢物語の影響」(『西鶴研究』第七集、一九五四年一〇月)、森田雅也「好色一代男」の世界―『伊勢物語』からの読みの試み―(『西鶴浮世草子の展開』(和泉書院、二〇〇六年三月、初出は『日本文学研究』(関西学院大学日本文学会)一九九二年九月)等。

- (2) 信多純一「好色一代男の研究」(岩波書店、二〇一〇年九月)、梶原愛加『好色一代男』巻四の四の挿絵をめぐって(『文学』第一〇巻四号、二〇〇九年七月)。(3) 拙稿「都のすがた人形」における「鶉の焼鳥」は何を意味するか(『誘惑する西鶴 浮世草子をどう読むか』笠間書院、二〇一六年二月)において長

崎であることの必然性について述べた。

- (4) 『色道大鏡』本文の引用は『新版色道大鏡』(八木書店、二〇〇六年七月)による。
- (5) 国土交通省淀川河川事務所ホームページ「淀川を知る」
<http://www.yodogawakki.mlit.go.jp/know/index.html>
- (6) 『新古今和歌集』本文の引用は新日本古典文学大系『新古今和歌集』(岩波書店、一九九二年一月)による。以下、すべて同じ。
- (7) 『伊勢物語』本文の引用は新日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語』(岩波書店、一九九七年一月)による。
- (8) 前田金五郎『好色一代男全注釈 下巻』(角川書店、一九八一年一月)参照。
- (9) 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』(笠間書院、一九九九年六月)
- (10) 前掲注(8)に同じ。
- (11) 『古今和歌集』本文の引用は新日本古典文学大系『古今和歌集』(岩波書店、一九八九年二月)による。
- (12) 拙稿「船に乗る世之介は何を意味するか」(前掲注(3)に同じ)
- (付記) 本稿は、平成二八年六月一二日に、秋田県カレッジプラザで開催された日本文学研究会第六八回研究発表会での口頭発表「西鶴の地名意識を考える」の内容の一部をもとにしている。席上、多くの方々に貴重なご意見を賜った。記して感謝申し上げる。